
青春のだらくそー!!

栗花落

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春のだらくそー！！

【Nコード】

N7600R

【作者名】

栗花落

【あらすじ】

主人公の裕子は15年ぶりに甲子園に返り咲いた佐川高校野球部のマネージャーになるため、高校でも続けるつもりだったテニスをやめた。そして、念願の野球部のマネージャーになれたが、思っていた以上に辛くそして大変な日々を送ることになった。そんな裕子も主将に恋をしてー！？野球も取り入れつつ、登場人物の恋愛も取り入れた小説です。読んでみてください。

入学！

「さあラスト1球……！！」

ドクン…ドクン…。

高鳴る鼓動はやむことを知らない。少女の心臓が時が流れることに
つれて音が大きくなっていった。

少女は夏の暑さも忘れ、セミのうるさい鳴き声さえ忘れて、ただた
だテレビに釘付けになっていた。

バシン…！！

「…っ。空振り三振ー！エースの高田、抑えて広島第一高校の勝利
ー！」

鳴りやまない歓声がテレビから溢れ出ていたー

ー次の年の春

少女の名前は「三浦裕子」。あだ名はゆっこ。

彼女がこの県立佐川高校に来た理由はただひとつ。野球部のマネー
ジャーになることだった。

裕子は小学校3年生から中学校3年生までずっとテニスを続けてい
た。

高校でも続けるつもりだった。しかし、ある人に誘われて急きよ志望変更。佐川高校に決めたのだ。

その「ある人」とは、去年の夏に佐川高校が15年ぶりに甲子園の舞台へと返り咲いたときに野球部のマネージャーをやっていた「香川幸子」にマネージャーをやらぬかと誘われたのだ。

裕子は初め、戸惑い悩んでいたが最終的には佐川高校にすることにしたのだ。

その幸子だが、実は…裕子の兄「三浦健太」の彼女なのだ。健太が高校2年生の2月から付き合い始め今もなお続いているという。美人と知られている幸子と、自分の兄が付き合っていると考えると

どうも幸子に悪いような気がしてならないと、裕子はつくづく思っていた。

「ゆっこお〜！写真撮ろうよ！」

急に呼ばれて初めて我に返った裕子は正門まで走っていった。

空は晴れ、桜が舞い散り、うぐいすが何匹も鳴いている今日は絶好の入学式日よりだった。

「あ、あとで写真焼き増しして渡すよ。とりあえず、中入ろっか？」

スラリと細く、長い足に高い身長。何よりも顔が整っている彼女の名前は「速見愛子」。

裕子の大親友の一人で性格は大人っぽく、姉貴肌で有名だ。あだ名

はあーこ。

小学校3年生から友だちとなり、それ以来ずっと親友だった。もう一人の大親友「内藤まゆ」は佐川高校ではなく、ここらへんではトップを争う名門校の県立原谷高校に入学した。

「お？ういーすっ！お二人さんお揃いじゃん」

「おー！大志！遅刻しなかったね」

「おいおい、俺をなめんなよ？先公に遅刻魔と呼ばれて早3年…しかあーし！こんな俺も4月から違う。純粹で、真面目で！そしてなおかーつ！素晴らしい生徒に生まれ変わるん」

「もう行く。マユナシの話なんかどーでもいいし」

「え。ちょっとゆっこ酷くねー！？」

裕子にいじめられている彼は「増川大志」。男女関係なく、みんなからは「大志」と呼ばれているが裕子からだけは何故か「マユナシ」と呼ばれている。理由は昔から大志は眉が薄かったから。という単純な理由でそう呼んでいるらしい。

「さてーと…あ、あそこでクラスが振り分けされてる紙配ってるみたいだよ」

3人は配っていた先生に紙をもらい、早速クラスをチェックした。

「速見…速見…おつ。3組か…ってゆつこと同じだ！」

「え？マジ？あ、本当だ！やったー！あーこと違うクラスだったらどうしようかと思ったよ」

2人は同じクラスになれて喜びを噛みしめていた。しかし、もう一人の男。大志は…。

「俺は…うわっ5組とか知り合い居ないわー。げー！嫌だなー」

「可哀想なマユナシーっ。ププッ。後で5組に行つてあげるよ」

「フンッ。別に来なくていいし！俺あ1人でこの1年間過ごすぜ！」

「いや、大志はすぐの友達出来るかな…」

「んなことねーよ。俺だって人見知り激しいんだぜ？」

「まー、もういいよ。行く、あー」

2人は大志を置いてスタスタと教室に向かってしまった…。

新しい環境で

「あ、ここ3組じゃない？」

愛子は早速教室を見つけ、裕子も教室の中へと入った。
教室の中はもうほとんどの人が揃っていて、騒いでる人やいすに座って

近くの人と話している人もいた。

「ふーん。なかなか騒がしそうなクラスがや？」

「とりあえず、席見つけなきゃね」

その頃…

「はあゝ。同じ学校の奴がいても暗そーな奴とか、中学では話したことが無い奴らばっかだしな…」

大志はひとり言を言いつつ、5組へと向かっていた。
廊下では知り合いの人が何人かいて、話しかけらたりしたが、皆違うクラスだった。

「俺、この教室で生きていけっかなー…」

教室に入ると3組と変わらない騒がしさが5組にもあった。

仕方なく、大志は席を見つけ座った。誰も話しかけられる人がいなくてうつ伏せになった。

同時にもう一度名簿順を読みなおした。

（あーあ。俺も3組が良かったな。知り合いたくさんいるし、ゆっこもいるし…）

考え事しながら読んでいくと、ひとつ気になる名前があった。

「坂本良平…？」

この名前にどうもひっかかった。しかも同じクラスだ。大志は席を立て、前に貼ってある

席順を確認した。廊下側から4列目の2番目…。すぐ後ろを向いた。すると、さわやかな笑顔が

眩しい男子生徒が数人の友人と話をしていた。

（…まさかな。あの良平じゃーねえよな）

大志たちが小学校4年生の頃だった。仙台から引っ越してきた名前が「坂本良平」だった。

裕子と大志とまゆが同じクラスで、遠い仙台からの転入生にざわめきが起こった。

良平は少し大人しい性格だったのか、しばらくは一人だった。

そんな中、大志が初めて声をかけたのだ。その後に裕子やまゆ、愛子と続いて5人で仲良しになった。

毎日学校から帰ってきて、いつもの公園で遊んでいた。女子vs男子のドロケイをやったり、他の子と

集まってドッチボールをしたりと、楽しい日々ばかりだった。

良平は溶け始めが早く、すぐに本当の良平を見ることができた。明るくて、時に冷静な性格だった。

そんな良平の学区内の中学は裕子たちとは別々だったので、やむを得ず離れ離れになってしまった。

（一応、話してみるのもいいかもな）

大志はいつも通りの自分に戻り、明るく話しかけることにした。

「うーすっ！…えと…」

（どうした大志！いつもどおりにいけー！）

なんて言えばいいのか分からなくなってしまい、大志は固まってしまった。

数人の男子生徒がじーっと大志を凝視していた。もちろん、良平もじーっと見ていた。しかし…

「…大志？」

「…！」

「お前大志じゃねーかー！！」

「やっぱり良平かやー！！いやあ、最初話しかけるべきか迷ったけど、やっぱりお前か！」

「誰？良平の知り合い？」

「おう。小学校の頃の親友でさ。中学は別々で。こいつも野球やってんだよ」

へーっと数人の男子は大志をじーっと見た。

「俺も、佐川の野球部に入ろうと思ってる川神っす！いやー、最初固まったからどうしたかと思ったよー」

「いやあ。こちらこそよろしく。増川大志です。大志って呼んでくれっ！」

「ぶっ…大志相変わらずじゃねーかー。そのバカっぷりは」

あははと笑いが起こった。良平は小学校の時よりももっとイケメンになっていて
さらにクールさが増していた。

「お、お前はすいぶんクールになったな。小学校の頃は本当に可愛かったのに」

「もうガキじゃねーんだよ。可愛いのはおさらばさ」

そんな話を交わして、どうにか大志は友達ができたようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7600r/>

青春のだらくそー!!

2011年4月6日11時55分発行